

選挙あれこれ

吉田 眞人

今年は世界的に選挙の年で、各国で代表を目指す戦いが繰り広げられた。

7月の英国の下院選挙では労働党が14年ぶりに政権を奪還した。同じ月のフランス総選挙では、(極) 右派・中道(マクロン派+共和党)・左派(極左が主導)の三つ巴の結果となり、政治的混乱が続いている。

「選挙もどき」と呼ぶべきものも多く行われた。ロシアではプーチンが圧勝、ベネズエラでは出口調査で大敗のマドウロが辛勝、イランでは穏健改革派が保守派に勝利(新大統領は最高権力者と同じアゼリ人でペルシャ人ではない)。これらの国では立候補自体が厳しく制限されており、「もどき」と呼ぶ所以である。

私事ではあるが、昭和30年代の初め、伯父が県会議員に立候補した。彼は旧制中学を卒業した後、長男であったので、家業(中小地主で織物業も営む)を継いだ。業績も順調だったのだろう、次は名誉と考えた。保守合同で成立したばかりの自民党から出馬すると金がかかる。そこで左右合併したばかりの社会党から出馬することにした。ただし元来保守的思考の塊なので、何を主張して良いかわからない。次男坊である私の父がいわゆる進歩派であったので(師範学校卒業後東京で代用教員、その後大学に進み、この間に大正デモクラシーの影響を受けた)スピーチ原稿等全てを父が書き、伯父がその通り読み、話す、という分担が続いた。無事当選し2期務めたが、さすがに途中からは進歩派風演説も台本無しに行うようになった。

現役員中に祖母(父、伯父の母)が亡くなり、盛大な葬儀が行われた。知事の弔辞等は覚えていないが、田舎の屋敷前の川沿いに、孫の数だけ柱を立て幟をはためかせた風景は、はつきり覚えている。

さて今年の選挙はこれからが本番で、今月末に日本の衆議院選挙、来月早々に米国大統領選挙が控えている。前者は、期待外れの組閣をした自民党が大苦戦を免れないだろう。後者は、「Dig Baby Dig」の実現が難しくなりそうで、極めて残念だ。

(2024年10月10日)